はじめに

我々が天竜川に抱く思いは人それぞれである。時々の思い出、場所によってその感じ方も異なる。しかしながら、誰もが一様に特別な感じを抱くのは天竜川の深い淵。青々として底が見えず、周囲の岸が切り立って、何とも言い様のない不安にとらわれる、異様な世界の淵であろう。本書では、この天竜川の淵にまつわる話を『熊谷家伝記』という本を中心にして、取りあげていきたいと思う。

それでは『熊谷家伝記』とはどのような記録だろうか。長野県の最南端、静岡県と愛知県に接して下伊那郡天竜村がある。この村の中央を天竜川は流れるが、天竜川の西側、村の南端に坂部の集落が位置する。ここは昭和二七年（一九五二）国の重要無形文化財に指定された、冬祭りの催される場所として全国的に有名である。坂部に関してもう一つ忘れてならないのが『熊谷家伝記』という、熊谷家の歴史を書き綴った記録である。これを今牧久は次のように説明している。

くまがいかでんき　熊谷家伝記　下伊那郡天竜村坂部の郷士熊谷家に伝わった家伝記。一三五二（文和一）年、初代貞直が当地に土着し、開発を始めていらい、家憲によって代々書き継がれてきた記録を資料として、明和年間に一二代次郎太夫直遐が整理し、編集したもの。四〇〇余年にわたる膨大な記録であるばかりか、私記にとどまらず、将軍、領主、代官の交代や変遷など天下の大勢や、当時の社会組織、経済事情、慣習、民間伝承に至るまで、南伊那・東三河の山村の生活が細大もらさず克明に記されている。この伝記は柳田国男博士によって発見され、絶賛された。宮下本（下伊那郡阿南町和合）、佐藤本（愛知県）の二本がある（註1）。

ここに説明されているように、『熊谷家伝記』は特に民俗学の世界では大変有名な本である。

民俗学で柳田国男とならび称される折口信夫は、大正六年（一九一七）最初に『熊谷家伝記』を見たと昭和二二年（一九四七）に書いている（註2）。折口信夫が信濃・三河・遠江に入るようになったきっかけには、早川孝太郎の花祭などの紹介があり、折口に『熊谷家伝記』を知らせたのも早川と考えられる。そして早川自身もその著作の中でこれを用いている（註3）。

今牧が触れているように、『熊谷家伝記』を有名にしたのは柳田国男だった。彼は『東国古道記』でこの本について触れ、「久しく名を伝へて居た珍書であるが、それを前年謄写版にした篤志家があり、最近は更に又活版にもしたから、もう埋没の危険だけは無くなつて居る。文體用字に統一があり、又後世にならぬと判らぬ筈の事も少々は書いてあるから、先祖の自筆に據つたというのは信じられぬが、内容には存外新たな附加へが無い」（註4）と評価した。なお、柳田はこれより早く昭和四年（一九二九）の「熊谷彌惣左衛門の話」（註5）で既に『熊谷家伝記』を利用している。

また社会学の大家有賀喜左衛門は、昭和九年（一九三四）に「村の記録」の中で、「正史に関連する記述の不正確さはあろうとも、この家伝記の興味は村内部の生活を記述することにあるのであるから、家系の粉飾的記述や年号における多少の相違や外部の出来事に対する記述の不正確さは、多くの場合ははなはだしい障碍とはならない」（註6）と述べた。

その後もこの本を用いての研究が続いた。竹内利美は昭和一九年（一九四四）に『中世末における村落の形成とその展開』（伊藤書店）を出したが、後に改訂し『「熊谷家伝記」の村々－村落社会史研究－』として昭和五三年（一九七八）に御茶の水書房より出版された。氏は一巻の貞直記については「関郷伝承以外は全く用がない」とし、二巻の永徳元年（一三八一）から永正八年（一五一一）に至る間は「史実のほどは何ともいえないが、さして相互矛盾するところはない」とする。三巻・四巻は永正九年から天正一九年（一五九一）であるが、「殊に天正検地時の村内記事はたしかで、本篇では最も活用している」とし、以後の記事は史実として理解し、村落の形成過程を描いた。

宮本常一も『山に生きる人びと』で「二代目を直常とよび、直常は文字を解したようで重要な事件があると一々書きとめておいた。そして一二代の直遐まで、年代からいうと永徳元年（一三八一年）から明和五年（一七六八年）までの間、およそ四〇〇年間の家伝記を残した。それを直遐が整理しなおしている。したがって各代の人びとの直接書いたものではないが、内容的には一応信頼できるものと思われる」（註7）、あるいは『天竜川に沿って』で「この家伝記の記事はかなり正確なものと見られ」（註8）としている。

地理学では、安藤慶一郎・矢守一彦が『国境いの村』で、「家伝という性格から、ことに草創のころを記した巻の若

い部分は、史料としては上等のものではないが、その限界をわきまえて読めば、中世の村の成り立ちを知る上で、またとない貴重な材料である」（註9）と評価し、活用している。

こうした流れとは別に、一九五八年に千葉徳爾は、『熊谷家伝記』の筆者直遐を民俗学でいう伝承者のタイプだとして、この本をフォークロアの方面から使うことを提唱した（註10）。

このように『熊谷家伝記』が活用されたのは、これが既に活字化されているからである。柳田が触れている謄写版刷りのものは、佐藤本の複製で大正一一年（一九二二）から翌年にかけて、年代記を欠いた七巻までを出した。ついで昭和八年（一九三三）に佐藤本を底本に宮下本、謄写版を参照して市村咸人の校訂によって伊那史料叢書として山村書院から四冊本で出た。ちなみに市村は「熊谷家伝記は其量に於て内容に於て数多き郷土的旧記類中、一頭地を抜くものである」（註11）と評価している。さらに佐藤本は愛知県北設楽郡富山村に寄贈され、昭和五六年（一九八一）から年代記を含めた七巻が複製された。

以上の事実によって、『熊谷家伝記』という本がいかに重要視されているかは、明らかであろう。そして、従来の研究にあっては、全体としてこの本の記載は事実としてとらえられ、特に山村のできかたが具体的にわかるということで着目されてきた。

ところで、この書物の舞台となった信濃・三河・遠江の三国の間の地帯は、山中を天竜川が縫うように流れており、天竜川と住民とのつながりが深かったはずである。そこで本書にあっては、千葉徳爾の提言に沿う形で、『熊谷家伝記』の中に見られる川、特に天竜川の淵にかかわる部分を取り出すことで、その記載の背景にある川に対して日本人が抱いてきた感情などを追究してみたい。これによって、『熊谷家伝記』が従来考えられてきたよりはるかに事実が少ない一端も明らかにできるのではないだろうか。そして、このことを通して、天竜川沿いの住民が長い間天竜川の淵に抱いた感情、ひいては日本人が川の淵という特別な場所に抱いた感覚の一端が明らかにできればと考える。

註

1 『長野県百科事典』二三四頁（信濃毎日新聞社・一九七四）
2 『折口信夫全集』第二八巻二六七頁（中公文庫・一九七六）
3 『早川孝太郎全集』第四巻三六八頁など（未来社・一九七八）
4 『定本柳田国男集』第二巻二四九頁（筑摩書房・一九七二、

本書は雑誌『旅』に一九四九年に連載され、一九五二年に長野県の上小郷土研究会より刊行された）

5 『定本柳田国男集』第五巻三三九頁（筑摩書房・一九六八）

6 『有賀喜左衛門著作集』第五巻三三一頁（未来社・一九七二）

7 宮本常一『山に生きる人びと』一二四頁（未来社・一九六四）

8 宮本常一『私の日本地図 1 天竜川に沿って』一一四頁（同友館・一九六七）

9 安藤慶一郎・矢守一彦『国境いの村』二五頁（学生社・一九七二）

10 千葉徳爾「田仕事と河童」（『信濃』第一〇巻一号・一九五八、この論文は『河童』岩崎美術社・一九八八にも収録されている）

11 市村咸人「『熊谷家伝記』の刊行について」（『中部芸術』一九三三年五月号）

湯立てをする熊谷家当主の伝一氏　（昭和40年頃）